高島ライフスタイル読本

Takashima Lifestyle Reader

「高島ライフスタイル読本」
滋賀移住ライフスタイル情報発信事業（湖西地域）

平成 26 年（2014 年）3 月

主管課名
滋賀県 総務部 市町振興課
〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目 1 番 1 号
tel : 077-528-3231　fax : 077-528-4820
mail : bh00@pref.shiga.lg.jp

企画制作
特定非営利活動法人 結びめ
〒520-1121 滋賀県高島市勝野 1108 番 3
tel : 090-5014-1600　fax : 0740-36-1661
mail : info@musubime.tv

印　刷
株式会社 ウエーブ

この冊子の著作権は滋賀県が有し、滋賀県の許可なく、無断で複製、
二次使用する行為、またはこれに類する行為を禁じます。

滋賀県高島市は、琵琶湖の西部に位置し、
総面積は約 693 k㎡（うち琵琶湖 181.64 k㎡）
総人口は約 5 万 2 千人です。

※広大な面積を描いているため、地図上の
点は、正確な位置を示すものではありません。
概ねのイメージとしてご覧ください。

高島ライフスタイル読本

高島市に移り住んだ人たちに、ここでどんなふうに暮らしているか、聞きました。

琵琶湖の西側に位置する滋賀県高島市。自然豊かな山々と里山、琵琶湖に囲まれながらも、京阪神から交通の便が良い「ほどよい田舎」です。この地域に移り住んだ人たち、年代も目的も、暮らし方もさまざまな 20 組に、高島に移り住んだ経緯や、ここでの暮らしについてお聞きしました。

また、移住者さんの話を聞き、「高島ライフスタイル読本」を作成するにあたり、高島市外からレポーターを募集しました。レポーターは「田舎での暮らし」や「高島市」に興味のある 11 人。地域外からの視点で「高島に暮らすこと」の現実を聞き取り、まとめました。

1	石脇 和さん（森林公園「くつきの森」勤務）	高島市 朽木 市場
2	鎗分 ゆかりさん（「和みのヨーガ」インストラクター）	高島市 勝野
3	嵯峨 将之さん（理学療法士） 仁実さん	高島市 安曇川町 中野
4	熊谷 雅己さん（高校教員） ももさん（高島市議会議員）	高島市 安曇川町 南市
5	榊 始さん（フォトエッセイスト）	高島市 朽木 小川
6	西川 明夫さん（朽木生杉区長）	高島市 朽木 生杉
7	河本 尚子さん（市内建設会社勤務）	高島市 勝野
8	中村 フミコさん（「Koti café」運営）	高島市 マキノ町 沢
9	是永 宙さん（「ECC学園高等学校」職員）	高島市 今津町 椋川
10	安部さん夫妻（「森林組合」勤務・看護師）	高島市 野田
11	野口 寛典さん（介護福祉士） 英美さん	高島市 朽木 荒川
12	荒木 佑介さん 侑子さん（「HAPPY SWEETS ki-mi-do-Re」運営）	高島市 勝野
13	小森 可美さん（「ちゃみの森」運営）	高島市 朽木 中牧
14	佐山 恭一さん 亜希さん（「Blue bicycle Shop」運営）	高島市 安曇川町 南古賀
15	加藤 みゆきさん（漫画家）	高島市 朽木 木地山
16	平井 崇さん（林業） 真季さん（アクセサリー作家）	高島市 安曇川町 中野
17	高橋 章隆さん 佳奈さん（「みのり農園」運営）	高島市 安曇川町 泰山寺
18	馬場 清さん 和田 恵子さん（「滋賀の奥座敷 天増川」運営）	高島市 今津町 天増川
19	北出 治恵さん（「喫茶 古良慕」雇われ店主）	高島市 新旭町 旭
20	岡野 史子さん（陶芸家）	高島市 今津町 岸脇

高島市は都市から近い“ほどよい田舎”

車で京都まで約 1 時間、大阪まで約 2 時間。JR（新快速）で京都駅まで 48 分、大阪駅まで 78 分。便利でありながら琵琶湖と山々が広がり里山に集落が点在する“ほどよい田舎”です。市街地にはスーパーや図書館が充実し、ほどほどの田舎暮らしが楽しめる一方、奥深い山の中では古民家を改修したり田畑を耕したり、自給的な暮らしを目指す若者たちも集まっています。

定住相談が好評です

高島市役所には移住を希望される方の様々な想いを聞きながら、住まいや仕事の相談に応じる「定住相談員」が居ます。高島市への移住を考えている方は、ぜひ相談にお越しください。市内を案内したり、移住実現者の紹介など地域でのつながりづくりをお手伝い。定住相談を通じて多くの方が移住を実現されています。「高島定住応援サイト」で様々な情報がご覧いただけます。

高島市 朽木 市場　石脇 和 さん（森林公園「くつきの森」勤務）

ものづくりから「物語づくり」へ

朽木の山あいに石脇和さんを訪ねた。ほんわか笑顔に優しい人柄が感じられる。

■高島に来たのはどうしてですか？

たまたま今津に、探していた仕事があったから。大学を卒業して、家具メーカーに就職。でも、木工がやりたくて退職し、職業訓練校で、ものづくりの基礎を学んだ。卒業したら、元の会社に戻る道もあったが、自分は敢えて違う道を選んだ。

■違う道に進んだきっかけは何ですか？

職業訓練校に入った年に、東日本大震災が起きた。報道で、身内を失って悲しんでいる人達を見て、自分も動揺した。卒業を前にして、これから自分は、どういう生き方をしようかと悩んだ。人が生きて行く原動力はなんだろうと考えた。今までの楽しかった思い出や記憶が心の支えになって、また頑張れるのかもしれないと思った。自分の中で出た結論が、自分の好きな山や自然の中でやれる仕事、記憶に残る「思い出」を提供する仕事がしたい、だった。

今は、森林公園「くつきの森」で働いている。仕事は講座の企画。森の中でランチやお茶会、ものづくりを楽しんで貰っている。みんなに森の楽しさを知って欲しいし、森の中で楽しい「思い出づくり」をしていって欲しい。

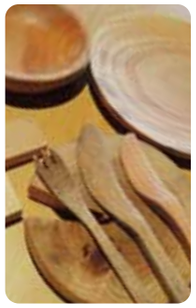
■朽木のどんなところが好きですか？

まずは人、人が良い。地元の人も職場の人も、「風と土の交藝」で出会う人も、ここに集まってくる人は、みんなココが好きで来てる。価値観が一致しているから、話をしてても共感できるし居心地が良い。青年団の合唱大会に参加したら、人から人へ一気に繋がりが広がって行って、面白い人に一杯出会えた。若い人も一杯。都会から「緑のふるさと協力隊」で高島に来て、そのまま移住する人も多い。前は仕事があるからココに来たけど、今はココが良いから、住むために仕事もしてる。逆になった。

■これからやりたいことは何ですか？

元々、父親譲りの山好き。折角こんな良い場所に来たので、山小屋を自分で建てたい。子どもが好きだから、優しい木のおもちゃも作りたい。子どもの頃から一緒で、大人になっても手元に置きたいと思って貰える、「物語」を紡ぐ一生モノのおもちゃを作りたい。森で働きながら、ものづくりをして、いずれは「風と土の交藝」に作家として参加したい。昔、「他人からの評価が自分の喜びになる」と言われたことがあった。その時はピンと来なかったが、「自己満足じゃないんだな」って、やっと分かって来た。人に喜んでもらうと、自分も嬉しい。

＊「風と土の交藝」…高島市で行われるオープンアトリエ型のアートイベント。高島市に住む工芸作家、古民家再生家、農家などの自宅や工房、40ヶ所あまりが公開され、作家と交流しつつ市内を巡る。毎年11月末～12月初旬、数日間に渡って開催される。http://www.kazetotsuchi.musubime.sy/index.html



これからの 石脇 和さん

毎月、手書きの通信「くつきの森だより」を発行している。漬物作りや青年団の活動など、田舎の日常を、詳しいイラスト付きで綴っている。これを本にして、みんなに田舎暮らしの素晴らしさを知って貰いたいと思う。

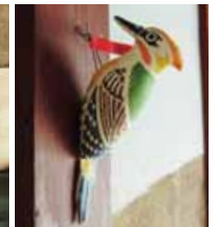
生涯学習で自己実現と地域の絆づくりをサポートしています。

レポーター紹介（石脇さん、鎗分さんを取材）

出町 明美 / でまち あけみ
滋賀県大津市在住・生涯学習専門員

針江で、自然と共に暮らす人達に出会って以来、高島が大好きな私。今回、お話させていただいた方達も高島の大ファン。自然、人、土地柄、全てが素晴らしい。高島には、人を自然に還し、再生させる力があるように思う。

（左）古い民家に女の子らしい空間をつくっています　（中下２点）住まいには森をイメージさせる小物がたくさん　（中上）「くつきの森」の看板をつくる石脇さん　（右）森を体験する様々な企画をしています。



高島市 勝野　鎗分 ゆかりさん（「和みのヨーガ」インストラクター）

田舎で伸び伸び、子育てもヨーガも！

鎗分さんの家は旧高島町にある。一刀彫の欄間や襖絵の龍が印象的な、和風の静かな佇まい。木と土のある家を探し続け、2年がかりで見つけたそうだ。

■なぜ田舎に住もうと思いましたか？

高齢出産で二人目を生んでから、田舎に興味を持った。元気な男の子で、一日一回は外に出ないとキーってなる。子どもには土が必要だと初めて分かった。もっと自然があるところに住みたいと思って探し始めた。本屋で『滋賀本』を見つけて、滋賀の自然の美しさに魅かれた。あちこち見て回ったが、高島に来た時、ココ！と直感した。空気が大阪と全然違う。「風の谷のナウシカ」みたい、風がよく吹いているからなのか、空気がキレイ、「ふぁ～」って、心が解放される。主人は、まさか私が本当に田舎暮らしをするとは思ってなかったみたいで、実行してしまったことをびっくりしていた。

■高島に来て、何が変わりましたか？

子どもは広い家で大喜び、元気に家の中で縄跳びしてる。団地暮らしだった大阪では、下の階に響くので「静かに」と怒らなくていいことで怒らなければならないのが辛かった。そのことがなくなって良かった。こっちに来たのは長男が年少の時だったけれど、保育園は待機児童の心配もなく、園舎は広くて手厚く見てくれる。無料で遊べる広い公園も一杯あるし、図書館も充実しているから、すごく子育てしやすいと思う。

■高島のどこが好きですか？

自然が一番好き。水がキレイで土が良いから何を食べてもおいしい。頂き物のタラの芽を天ぷらにして主人に食べさせたら「世の中にこんなにおいしいものがあったんか」って驚いてた。最初は文句ばっかり言ってた主人が、今は友達を一杯連れて来てスキーしたり、ログハウスを自分で建てたいって勉強を始めたりしている。移住して四年、主人もすっかり田舎暮らしが好きになったみたい。

高島は人も良い。しぐれたりすると洗濯物をそっと軒下に移してくれてる。見守って貰ってるんやなって、ありがたく思っている。

■これからやりたいことは何ですか？

「和みのヨーガ」を伝えていきたい。ヨーガは「つなぐ」という意味。自分の手を使って、身体と心を繋げる。ゆらゆら揺らすと寝ちゃうくらい気持ち良い。私自身、高齢出産で腰痛がひどくて何年も苦しんでいた。それがすっかり治った。お伝えするのは恩返し。和みのヨーガをお伝えすることが、高島に住まわせてもらっている恩返しになるのではないかと思っている。

これからの 鎗分 ゆかりさん

ご主人とは「前より仲良し」と笑う鎗分さん。ご主人が建ててくれる琵琶湖の見えるログハウスで、高齢者も障がい者も支える家族の方も一緒に、「和みのヨーガ」をするのが夢だ。今、見晴らしの良い土地を探している。

（左）日当たりの良い和室はお子さんが思いきり遊べるこども部屋に（中上）鎗分邸外観（中下）玄関にお子さんが描いた絵を飾っています（右）『滋賀本』を見て高島に来たいと思いましたと、鎗分さん

＊「滋賀本」…2007年7月、京阪神エルマガジン社より発売。滋賀県のオシャレなお店や観光地などを紹介したガイドブック。当時、滋賀県のみを紹介したガイドブックは珍しかった。

高島市 安曇川町 中野　嵯峨 将之さん（理学療法士）仁実さん

小さな喜びを感じ、丁寧に暮らす

2011年3月11日。すべてが変わってしまった。嵯峨将之さん仁実さんご夫妻は当時、栃木県塩谷町に暮らしていた。強い揺れのあとにやってきたのは放射能だった。長女は2歳、仁実さんは第二子を妊娠していた。子供たちへの影響が心配で、震災から1年経った頃「西に逃げよう。」と決意し、東京・銀座の「田舎暮らしフェア」で高島と出会った。沖縄や九州も考えたが、「南の島より森がよかったから。」と仁実さんは言った。

高島に来てからは貧家に住んでいたが、昨年12月に安曇川町中野に家を建てた。薪ストーブがあり、ほんのりと暖かい土間がある。薪ボイラーによる床暖なのだそうだ。壁がなく、目が届くところで、二人の娘さんが遊んでいる。将之さんはがりがりとコーヒー豆を挽く。土間の向こうで仁実さんが湯をわかしている。近くに湧水があり、そこの水を汲んできているそうだ。コーヒーをいただく。とても美味しい。その訳は仁実さんの言葉にあった。「手をかけて、丁寧な暮らしがしたい。」

便利なものにはすぐ飛びつき、あくせく働く私にはすぐには理解できない言葉だ。そんな私に仁実さんは言う。「便利なものを使っても、楽にはならないでしょう。」その通りだ。私はいつも電子音に追い立てられる。なんのために？「本当に大切なものは多くはないんです。小さなことに喜びを感じられたらそれでいい。」ここではパチパチと薪が燃える音、雨が森を濡らす音、落ち着いた会話、しか聞こえない。でも、小さな喜びがここにはあると感じさせられるから不思議だ。

だが、ここは理想郷ではない。大飯原発の50km圏内である。自然エネルギーで暮らしたいが、原発の恐怖があることも確かだ。「人生は思い通りにはならないし、どうしようもないことは絶対にあるから、折り合いをつけて暮らしていく必要がある。」と仁実さん。私たちは人生のそのときどきに住む場所も、家も、燃料も、食べ物も、選び取って生きている。そうしてライフスタイルができあがる。仁実さんは「家とはこういうものであるという固定観念はいらない」という。なるべく電気を使わないよう薪割りをし、鍋でご飯を炊く。時々は風呂もわかす。「しんどくならない程度に」と笑う。

仁実さんが大切にしている言葉を教えてもらった。「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。」高島はそんなふうに生きられる場所なのかもしれない。今更ながら仁実さんに気付かせてもらった。

嵯峨さん家族のこれからの暮らし

いつかは畑で野菜をつくったり、田んぼでお米をつくったりしたいというご夫妻。理想は家族で季節を感じながら、ゆっくり暮らすこと。今はまだこの家に引っ越ししてきたばかりだけれど、これからこの山里で丁寧な暮らしを実現していきたいそうだ。

高島に、ふるさとがあることがうれしい！

レポーター紹介（嵯峨さん、熊谷さんを取材）

若林 佐恵里 / わかばやし さえり
京都府京都市在住・日本語教師

ももさんの圧倒的な存在感、仁実さんの芯の強さに惹きつけられた。どのように暮らすかは、どのように生きるかだ。わたしはどのように生きたいか？まだまだ霧の中である。この取材は自分と向き合うきっかけとなった。

（左）嵯峨邸内観、高島の木を使った「小さな暮らしの家」（中上）嵯峨さんご家族（中下）嵯峨邸外観（右）嵯峨さんの移住と新居の完成を集落の人々に伝えるセレモニーを開催（NPO法人「結びめ」主催）

（左）薪ストーブのある土間空間でくつろぐ熊谷さん家族（中上）家全体を暖めてくれる薪ストーブ、調理も可能（中下）計画中のカフェの設計図（右上）熊谷邸外観（右下）薪割り機も購入しました

高島市 安曇川町 南市　熊谷 雅己さん（高校教員）ももさん（高島市議会議員）

地に足のついた生活を求めてたどり着いた

安曇川駅から歩いて10分。旧役場や学校、商店街がある田舎のなかの都会・南市に熊谷さんの家はある。

ご主人の雅己さんのお祖父さんの代から空家になっていた家に移住して3年。今にもう崩れそうだった家を週末に通って補修した。土間には板が張ってあったが、剥がして昔の大きな土間に戻した。そこに薪ストーブを置こうと雅巳さんが言い出した。薪ストーブは想像以上に暖かだ。この集まる。家族も、近所の人も。これがあれば、電気もガスも要らないが、薪を集めるのは大変な作業だ。薪は一年間乾燥させなければならない。雅己さんは言う「別にエコとか考えている訳じゃなく、ただ、おもしろいんです。」ももさんも「この人の一年間の労力を無駄にしたくないんです。」と微笑む。家族の思いを受け取りながら生きる生活がここにはある。雅己さんは「地に足のついたほんまに人間らしい生活。」という。

3年前まで人口増加が著しい滋賀県栗東市に住んでいた。そこでの幼稚園で子供は大勢の中の一人だった。お子さんは当時、相当内気だったというが、ここに来てから子供らしくわんぱくに変わった。幼稚園では、転園のずっと前からゲタ箱や机に名前をかいて、子供達が来るのを心待ちにしてくれていた。一家にはそれが嬉しかった。地域の祭りにも子供の笑い声が戻り、近所の人たちが喜んでくれた。

ただ、ももさんが残念に思っている事がある。それは高島の人が高島の良さに気づいていないこと。初めて高島を訪れた、ももさんの第一印象は「ここはまさに桃源郷。」森があり、川が流れ、その川を中心に田園が広がっている。自然のサイクルとともに人々が生きている。

私はかつて自然以外に何もない高島が嫌でたまらなくて飛び出した。飛び出して18年だ。18年経ってもほとんど何も変わっていない。地元の人たちは18年前のわたしの気持ちと同じに違いない。しかし、ももさんは力強く言う。「ここにはすべてがある。きれいな空気も、顔がみえる付き合いも。」ももさんは高島のありのままの良さを生かすことを訴えて、高島市議会議員選挙に立候補し見事当選した。議員のほとんどが地元民という状況で、高島の良さを訴え、若者定住や教育問題に取り組んでいる。

ももさんの話を聞いていると「高島で生まれてよかった。」そんな気持ちがじんわり溢れてきた。18年の間に都会の人間になってしまったのかもしれない。

熊谷さん家族のこれからの暮らし

地元の人が高島の良さに気付いてくれるよう、「ありのままが素晴らしい」と言い続けたいと、ももさん。そのきっかけになればと、自宅の離れをカフェにする計画が進行中。手作り感あふれるあたたかいカフェにしたいそう。今秋にOPEN予定。

高島市 朽木 小川　榊 始 さん（フォトエッセイスト）

後輩たちへの『熱いエール』

針畑地区の南、織りなす山々の雄大な景色とは真逆の、やわらぎある雰囲気の集落・小川に榊始さんはお住まいです。

■大阪から小川へ

榊さんは、もともと大阪で仕事をされていましたが、その仕事にひと段落つけ、しばらくは好きな山登りに奥さまと一緒に行かれていたそうです。「そうしているうちに、田舎暮らしに関心を持ち始めたんですよ。」とにっこり。ある日、榊さんは小川の土地販売の広告を目にされます。「すぐに連絡をしました。」購入までは時間はかからなかったそう。当初、家が無い間、榊さんはバスを乗り継ぎ、運転免許をとって『通い住まい』を続けられていたそうです。

■家を建てる

榊さんは、大阪にお住いの頃から林業組合の催し物などによく参加されていたそう。あるとき、『地の材料で家を作る』という趣旨のモデルハウス展覧会に参加され、「ああ、こういう家に住みたいな。」と思われたそうです。そのモデルハウスの設計士さん達と相談し、今の家が小川の地に建てられることになりました。榊さんは、「当初の予定より時間がかかったけど、いいお家ができた。」と目を細めておっしゃいました。

■小川生活を振り返って

「最初、積極的に何かをする気はありませんでした。でもある時、大阪の友達に、仙人にでもなるのか？と聞かれ、はっとしました。」今も続けられている『朽木小川だより』というミニコミ紙は、はじめ、ハガキ一葉から始まったそうです。

「私は、小川の一員になるために何かを働きかけることはしませんでした。小川の一員に入れるかどうかは、小川の人が決めることだと思うからです。集落の方々が『よい』と思われた時に迎え入れてもらう方が、無理がないでしょう？」

また、榊さんは『憧れだけでやっている素朴な田舎暮らし』というイメージには違和感があるそう。「今は、妻が大阪で仕事をして、この生活を支えてくれています。貧乏では移住生活は立ち行きません。素朴な田舎暮らしというイメージを持っている方には、現実を知ってもらう必要があると思います。」

他所の土地に入って生活するとなると難しいこともある。「だから『後輩』のために情報を発信し続けていきたいと思っています。」そうおっしゃる榊さんの目は、優しさの奥に『強さ』をたたえていらっしゃいました。

榊 始 さんの これからの暮らし

小川や高島市のお仕事に精力的に取り組まれていた榊さん。今の目標は『自分の生活を第一に考える』ことだそう。最新情報は『朽木小川より「ITのデジカメ日記」滋賀の奥山・針畑郷からフォトエッセイ』で絶賛発信中！

朽木市場や今津町
椋川へ峠々「はり灸」に
寄せてもらっています。

レポーター紹介（榊さん、西川さんを取材）

坂部 昌明 / さかべ まさあき
京都府京都市在住・はり灸師

元々、“地域医療”をテーマに、京都から高島市に「はり灸」の往診に伺っていました。色々な方々に出会い、「もっと高島市を知りたい！」と思ってレポーターに応募しました。新しい出会いに喜びもひとしおです！

（左）始さんの写真を飾り、お客様を迎えられる榊夫妻（「風と土の交藝 2013」にて）（中上）森の恵を果実酒に（中下）あたたかい木の空間、古い家具などでほっとできるリビング（右）冬、雪に包まれる榊邸

（左）都市との交流機会にて挨拶する西川区長（中上）春の風景（中下）名産品「鯖のへしこ」（右上）生杉は琵琶湖の水源地です（右下）1月に行われる「どんど」針畑には伝統的な行事が数多く残る

高島市 朽木 生杉　西川 明夫 さん（朽木生杉区長）

改めて知るふるさとの『よさ』

朽木屈指の豪雪地帯、生杉は針畑地区の西のほう。西川明夫さんは、京都精華大学のセミナーハウスの管理人などをされています。

■生杉から京都へ、そして生杉へ

西川さんはもともと生杉で生まれ育ちました。そして、10代後半から京都に出て、42年と8か月、京都で仕事をされていました。「還暦を過ぎて、老親の介護のため会社を退職し、ふるさとに帰ろうと思ったんです。」西川さんは、生杉での生活を再開してから、ふるさとの『いいところ』をたくさん見つけられたそうです。「ここは本当に素敵なところです。毎日、いいところを発見できる。長くふるさとを離れていたので、余計にいいところが『良い』と感じられるのだと思います。」とにっこり。

■移住者への思い

生杉に帰ってきた西川さんは、集落の仕事を何一つ断らずに引き受けていったそうです。「私が生杉に戻ってきたとき、既に移住してきた人たちがいました。彼らは、私がいない間、生杉の『先輩』の相手をしていてくれていた。それは、本当なら私たちが担っていたことなのです。本当に申し訳ないなと感じました。感謝の念もいっぱいです。だから、私は帰ってから生杉のために何でもしようと心に誓ったのです。」

■新たな針畑の姿を求めて

現在（2014年1月）区長を務められる西川さんは、今年『区長会』を再結成しました。理由は、『針畑地区の団結力を高めたい』からだそう。「現在の区長さんたちは、互いに仲良くさせてもらっています。この団結力を、次代へと引き継いでいけるようにしたい。そして、針畑地区を活性化し、地区の良さを多くの人に知らせていきたい。」西川さんは目を輝かせながら話されていました。また、西川さんは移住者の方との交流の中で、『地の人間がしっかりしないといけない』と思うようになったそうです。「ふるさとの良さをしっかり伝えていくのは、地の者の大事な役割だと思うんです。」西川さんは、移住者や地の人々との団結の輪を広げるため、よく『一杯のみ』をされています。『顔つき合わせ、一献かたむけ、うだ話』は西川さんのキメ台詞。人を愛し、故郷を愛する西川さんの姿は、さながら『生杉の寅さん』という感じでした。

「私は、ここで生まれ育った人に、またここで暮らしてほしいと思っています。」西川さんは、移住者だけでなく、Uターンを考えている方の『よき先輩』でもあるのだなと思いました。

西川 明夫 さんの これからの暮らし

区長の交替が今年あるそうですが、これからもふるさと生杉のために、様々な仕事にいそしまれるそうです。また、ライフワークである針畑地区の歴史・民族研究（方言・屋号など）も再開したいと語られていました。

高島市 勝野　河本 尚子 さん（市内建設会社勤務）

やっぱり、高島が好きだから

車が到着すると、カーテンの隙間からくりっとした目の利発そうな男の子の顔が覗いた。この家に住む河本尚子さんの息子、集翔くん(6)だ。ここはJR湖西線近江高島駅から徒歩5分ほどの一軒家。中へ入ると集翔くんの絵をセンス良く飾った額縁や小鳥のイラスト付きの白い木枠など、ものづくりの大好きな河本さんがひと手間加えたインテリアが光る。

高島に来たのは病院も学校も近く便利な他、自然の中で子育てしたかったからと言う。「カーテンを開けると山が見えたり、湖岸でのんびりパンを食べたり…何気ない日常の中に自然を感じられる暮らしが大好きです！」と目を輝かせて話す河本さん。ここでの暮らしを満喫しているように見えるが、実はここに来てからシングルマザーになった。大阪出身の彼女にとって身寄りのない地での2人暮らし…。だが、高島の人は温かく受け入れてくれたようだ。『1人も2人も一緒』と集翔を預かってくれたり、『いいよ、おいで』と魚釣りや流し素麺に誘ってくれた」と多くの人に支えられての今に感謝する。

人前では明るく振る舞う河本さんだが、時には将来への不安や孤独、集翔くんに寂しい想いをさせている心苦しさから夜一人で泣き明かすこともある。それでも「私が積極的に動き関係を広げることで、集翔にチャンスや経験を与えてあげたい」と気持ちを新たに飛び込んでいくようだ。1人で仕事も子育てもし、夜は眠気と闘いながら勉強し資格も取る、そんな河本さんの前向きなパワーはどこから生まれるのだろう?「やっぱりこの地と人からかな」。『みんなでわいわい』楽しむ土地柄が、河本さんにはぴったりなようだ。『自分が好きで選んだこと』が、彼女にとって大事であることを示す例がもうひとつある。河本さんは以前、日本航空のグランドホステスとして働いていたことがある。中学生の頃から憧れた夢だからこそ、就職後どんな厳しい状況でも耐えられたと話す。とは言え、自分の感覚を集翔くんに押しつけるようなことはしない。「ここは好き。でもここでの暮らしを集翔に守り続けてほしいとは思わない。縁もゆかりもないからこその自由。自分の夢を持って好きに生きてほしい」と願う。

最後にもう一度ここの魅力を聞くと「晴れた日は湖面がキラキラしてほんとキレイで。それと蛍！近くの川にたくさんいるんですよ。初めて見た時は感動のあまり声が出ませんでした！」高島の話になると、やっぱりにこにこ笑顔が隠せない。

河本 尚子 さんのこれからの暮らし

「今は時間がほしい。庭を飾ることや家庭菜園、テラスでカフェやものづくりとかやりたいですね。やりたいこと一杯あるから10歳は若返りたい」と笑う。もちろん大好きなこの地で、またいつか家族を作ることも夢だとか。

人と出逢い、お話をお聴きし、その暮らしや仕事、魅力を伝えていくことが大好きです。

レポーター紹介（河本さん、中村さんを取材）

白水 育世 / しらみず いくよ
京都府京都市在住・協働コーディネーター

人の生き方・ライフワークに関する話を聴くことが好きだったので、今回の仕事に興味を感じ応募しました。取材させて頂いたお2人は非常に魅力的で、今の暮らしへの思い入れがとてもよく伝わってきて、私まで元気や幸せを頂きました。

（左）絵を描いたり工作好きな息子を温かく見守る河本さん　（中上）空の世界に想いを馳せて…（中下）センスが光るインテリア（右上）周りを和ませる愛らしい笑顔（右下）大事に飾られた集翔君の作品

（左）木調の温かみと白壁ですっきり整えられた店内（中上）つい目がいく店内の小物たち（中下）Koti cafeの外観（右上）遊び心のある天井のイラスト（右下）温かな光を投げかける外灯

高島市 マキノ町沢　中村 フミコ さん（「Koti café」運営）

皆が集う店は私のもう1つのお家

JR湖西線マキノ駅から車で10分ほど走ると、突然目の前にメタセコイヤの並木道が飛び込んでくる。辺り一帯、山や果樹園など豊かな自然が広がる一角に、白い一軒家『Koti café』は佇んでいる。若葉型にくりぬかれた緑色ガラスの小窓が印象的な扉を開けて中に入ると、吹き抜けの天井に白と焦げ茶を基調色としてセンス良く整えられた店内。所々に愛らしい小物が置かれ、本や雑誌もあるので1人のお客でもふらっと立ち寄れる。

『Koti』とは、フィンランド語で「家」のこと。オーナーの中村フミコさんは「ここに集まる人が『もうひとつの家』として居心地よく過ごせるように」という想いをこめて、2011年9月、この店を開いた。東京で美容師をしていた時代、圧迫されるような場所に息苦しさを覚えていた中村さんにとって、マキノは一番「しっくりくる」場所だった。窓外に眺められる四季は美しく、毎日いても飽きない。

ここでカフェを開こうと決めた時、便の悪さを理由に周囲は反対したけれど、友達の1人が『ひとまずやってみたら?』と背中を押してくれたから始められたと話す。もともと幼少の頃から手芸や菓子作りなど手仕事が大好きだったので、白壁を塗ったり店の扉の取っ手に拾ってきた流木をつけたりと、工務店やペンキ屋の友達の手を借りて1つ1つ手作りしていった。「お店づくりを通して、1人で思っているだけではやれないことが、人と人がつながることで実現する」と実感した中村さん。この場所が他の人の『何かしたいな』を応援する場所にもなってほしいと、知人が企画するイベントチラシや作品を展示するうちに、その想いに賛同する仲間が寄ってきて、情報発信やイベント開催の場となりつつある。

みんなで何かすることも、1人行動も共に好きな中村さんにとって、大切に思うことは『1つにならなくていい』ということ。「みんなそれぞれでいい。その違いや力を活かせば、もっといいものができる」。

もちろん1人でお店を切り盛りしていると疲れることもある。そんな時の気分転換は「車内で大好きなミスチルの曲を爆音でかけて、ひとりカラオケ」と笑う。レジ横にはミスチルボーカル・桜井さんの満面笑顔の写真を貼って元気を頂いている。

地元産食材にこだわって作るカフェご飯は人気が高く、毎回同じものを注文する客もいるとか。そんな客への細やかな配慮があるからこそ、『Koti café』がみんなにとって、思い思いに過ごせる『お家』のような存在になりえるのかもしれない。

これからのKoti café

「昔からあるいいもの（例えばおばあちゃんが作る味噌や伝統工芸品の良さ等）を次の人に伝えること」と中村さん。2階のギャラリー化、庭の手入れ、野外イベントと夢は尽きない。少しずつ手を加えながら、いつか叶えるそう。

高島市 今津町 椋川　是永 宙 さん（「ECC学園高等学校」職員）

「甘える」ことも大事

椋川（くらがわ）に定住してもう10年以上の是永宙（これながひろし）さんは移住者としては「ベテラン」の域に入る方です。

出身は鳥取県米子市。大学時代に椋川の近くの朽木（くつき）で暮らし、大学を卒業後は兵庫県で不登校児童のカウンセラーをしていました。そんな時、大学時代の朽木の知人から「椋川に新たにひきこもり支援の施設を作るので、そこで働かないか。」という相談を受けました。大学で農学部に在籍していた是永さん、農山村の環境保護にも興味を持っており、その話を受けて、現在住んでいる椋川にやってきました。最初はもの珍しそうにしていた村の人とも、頼まれて山仕事や農作業を手伝うようになり、徐々に打ち解けていきました。その後、施設を退職してからも椋川に残り、現在に至ります。

現在、村の人と移住を希望する人との橋渡し役としても頼られている是永さん。集落には是永一家を含む3世帯が移住しています。村の人が移住に対して好意的だったこともありますが、移住の先輩である是永さんの存在が、大きいことは間違いないでしょう。年に数回、移住を希望する人が相談に来られるそうです。そんな時、是永さんは、集落での暮らしのアドバイスとして「頼まれごとは断らないこと」「溶け込む姿勢をちゃんと見せること」「迷惑をかけるのを恐れないこと」を伝えています。

「自立した生活のために、スキルを身につけてから、田舎に入ることも大切なのですが、迷惑かけることを恐れる余り、村の人の申し出を断ったり、なんでも自分で解決してしまっていては、村の人との接点ができない。常識の範囲での『甘える』ということは、村の人とコミュニケーションをとるために非常に重要です。」「贅沢な暮らしをしなければ、月に夫婦で十数万あれば生活はできる。地域には何らかのアルバイトがあって、すぐに生活に困るものではない。多いに越したことはないが、単身者であれば百万円程度あれば、とりあえずはなんとかなる。それよりも、移住することで得られるもの、新たに勉強しなければならないことを、真摯に村の人から教えてもらうことが大事だよ。」と地域の人と関わる姿勢が大切だと話されます。

集落での暮らしは、馴染みのない風習や行事など、移住者にとっては戸惑うことがたくさんあります。そして人との関わりが非常に重要です。事前に地域集落の情報収集をしたり、移住前でも地域の行事に参加してみたり、是永さんのような相談できる人を見つけることが成功の秘訣です。

是永 宙 さんのこれからの暮らし

椋川の文化の担い手として10年後には失われてしまうであろう村の人の「知恵」や「技術」といった無形の財産を守っていきたい。

高島市への移住、生活基盤が構築できず断念した経緯あり。

レポーター紹介（是永さん、安部さんを取材）

深田 克己 / ふかだ かつみ
滋賀県大津市在住・web デザイン等

自身も田舎暮らしを希望したことがありましたが、その時に感じた問題点があり断念しました。その経緯をふまえ、移住希望者目線で少しでも移住したい人の背中を押せる様な内容にしたいと思いました。

（左）集落のイベントにて、家を開放しお客様をもてなす是永夫妻（「おっきん椋川」にて）（中上）集落のシンボル「おっきん椋川交流館」（中下）夏の風景（右上）秋、集落遠景（右下）冬、雪の是永邸

（左）ご自宅の居間でお話くださる安部夫妻（中下）安部邸外観、同じ集落に大家さんが住んでいます（右上）安部邸の周辺に広がる風景（右下）奥さまが勤務する高島病院。JR湖西線近江高島駅の前にあり

高島市 野田　安部さん夫妻（「森林組合」勤務・看護師）

田舎には住む理由が十分あります

がっちりした体つきだが真面目そうな面持ちのご主人と、優しそうな奥さま。私がすでに失ってしまった新婚の雰囲気がある、初々しいお二人でした。

滋賀県大津市で育った安部さんは学校卒業後、東京で就職し、そこで地元滋賀県の良さを再確認しました。その後、大津市で自営業をする父親を手伝うようになりますが、自分のやりたい仕事を探す中で、森林組合に求人を見つけ、就職を決めました。研修期間を経て現在3年目です。「移り住むならやっぱり滋賀県が一番です。日本中を旅しましたが、滋賀県に匹敵する所はなかなかありません。」と安部さん。当初は実家のある大津市から通勤していましたが、半年前の結婚を期に、高島市に移住しました。

登山が趣味の奥さまも「武奈ヶ岳は本当に良い所です。何度行ってもきれいで楽しい。」と滋賀県の魅力を語ります。看護師である奥さまは看護の仕事を極めるなら、医療技術の導入が早い都市部が有利であるため、移住には迷いもあったそうです。しかし、お二人での暮らしを楽しみたいと移住を決心しました。「これから、地域の活動などにも、積極的に参加したいです。」とのこと。

安部さんの仕事は午後3時頃には終ります。陽が暮れる前に下山して明日の準備をします。「山の中を歩き回る仕事はハードですが、楽しいです。冬場は仕事があまりなく、スキー場でアルバイトをします。もともと山が好きで登山もしましたが、最近はあまり行かなくなりました。」

高島での暮らしの中で感じる事は「やっぱり人がやさしいです。近所の子ども達が挨拶をしてくれたり…当たり前かもしれませんが、都会ではほとんど見かけないので感動しました。」

家探しについては、「新婚なので賃貸物件を探しましたが、高島にはあまりマンションなどはなく、市内の不動産屋で貸家を見つけるのも難しいです。私の場合は市役所で行われている定住相談に行きました。市では移住希望者と大家さんとのマッチングを行ってくれます。」

これから移住したい人へのアドバイスとして、「高島は都会との距離感が良い場所だと思います。京都や大津へ通勤している人もたくさん居ます。田舎で仕事を探すのは大変なので、都会に通勤するのも良いと思います。自宅を高島に置くということに十分意味があると思います。ゆったりとした環境は都会では味わえません。ほどよい田舎（笑）なので、田舎暮らしをする前の練習には良い所だと思います。」と語ってくださいました。

安部さん夫妻のこれからの暮らし

将来、家を建てたいと思っています。私は近代的な建物が好きなのですが、「せっかくだから古民家がいい」という妻と家の好みが合わないので目下討論中です。

高島市 朽木 荒川　野口 寛典 さん（介護福祉士）英美さん

心の余裕で家族が笑顔に

安曇川駅から田園風景を眺めつつ車で約15分。到着したのは朽木エリアの入口・荒川。田園風景に囲まれた、日当たりのよい3DKの平屋に住むのは野口さん家族（寛典さん・英美さん・由結ちゃん）。なんと、この建物、築10年の市営住宅だという。家賃は月2万円以下というから驚きだ。

京都出身の野口さん夫婦は、結婚前、京都市内の介護老人福祉施設で働いていた。ある時、仕事を辞めた寛典さんは、姉の紹介で自然農をしている人と出会い、自分で食べ物を作れる楽しさに目覚めたという。そして、三重県の赤目自然農塾に初めて行った時、「高島の棚田で自然農の担い手を募集している」という話を聞き、すんなりと「じゃあ、僕がやります」と移住を決めた。介護福祉士の資格を持っていたこともあり、2010年10月に移り住むやいなや、介護老人福祉施設での就職が決まり、11月からは働き始めていたという。

2011年4月に結婚し、英美さんも高島へやって来た。なんと英美さんは、母の実家が今津で、小さいころ遊びに来ていたというご縁の持ち主であった。湖が美しく、身近に山があり、あまり町が開けていないという、ほどよい田舎環境が気に入っている。

現在は、家から車で5分のところに畑を借り、また寛典さんが職場へ行く道中に立ち寄ることのできる、車で15分のところに田んぼを借りている。いずれも知人からの紹介で、ほぼ無償で借りているという。人と人とのつながり、ご縁が、田舎暮らしにおいていかに重要な意味を持ってくるかが、ひしひしと感じられる話だ。

今は、勤務時間を少し減らして、家庭と農と仕事とのバランスを取りながら、心地よく過ごせるライフスタイルを模索している様子の寛典さん。もうすぐ2歳になる娘さんの子育てまっただ中の英美さんは、「京都にいる時はお金がないと不安だと思っていたが、こちらの自然環境のおかげか、そういう気持ちがなくなり、かなりストレスが減った。母である自分が気持ちよく毎日を過ごしていることが、子どもにもいい影響を与えていると思う」と笑顔で語る。

何よりも家族がともに過ごす時間があること、そして自分たちで育てた米や野菜を食べられること、身近にある豊かな自然環境、子どもが大空の下のびのびと遊ぶ姿…。ともすれば何気ない日常の風景を幸せと感じられる、ゆったりとした暮らし。そんな心の余裕を与えてくれるのが、高島の魅力ある生活環境なのだろう。

野口さん家族のこれからの暮らし

「本当は古民家が好き」と語る野口さん夫妻。ゆくゆくは高島で家を持ちたい。住んでいて楽しい木造の家を建てるのが夢。しかし焦ることなく「ご縁があるところに行ったらいいかな」とゆったり考えている。

近い将来、生活をスローシフトして、より土と縁に近い生活をしたいです。

レポーター紹介（野口さん、荒木さんを取材）

李 妙子 / りたえこ
京都府京都市在住・学校事務職員

取材を終えて、特に田舎暮らしでは「出会い」や「つながり」が大切だと改めて感じました。また、自分と同じ 30 代の人たちが田舎暮らしを実行しているのを目の当たりにし、夢物語ではないのだなと勇気をもらいました。

（左上）日当たりの良い居間　（左下）居間とつながるキッチン　（中上）明るく気さくな寛典さん　（右）自然農の田んぼで元気に遊ぶ由結ちゃん（右下）野口さん家族が暮らす市営住宅の外観

（左）荒木夫妻、佑介さんが床を貼った居間にて（中上）キッチンスペース（中下）侑子さんが作る焼き菓子（右上）荒木邸外観、古い城下町に残る長屋（右下）自然農でのお米づくりのための脱穀機

＊「自然農」…自然農法とは、不耕起（耕さない）、不除草（除草しない）、不施肥（肥料を与えない）、無農薬（農薬を使用しない）を特徴とする農法。ただし実践者によって手法はさまざまだと言われます。高島市では、自然農に取組む人達が、集まって米づくりをしていたりします。野口さんと荒木さんも一緒に田んぼを作っています。そして、荒木さんのお家の前の住人は野口さん家族。つながりの中で「住まいや「食」や「職」が見つかります。

高島市 勝野　荒木 佑介 さん　侑子 さん（「HAPPY SWEETS ki-mi-do-Re（キミドリ）」運営）

「田舎力」向上し理想の暮らしへ

京都駅から新快速を利用して約40分で到着する近江高島駅から徒歩5分の貸家に住む荒木佑介さん・侑子さん夫妻（ともに32歳）。大阪の専門学校のカフェクラスで出会った二人は、2012年9月に高島へ移住。理想の暮らしへ大きな一歩を踏み出した。

佑介さんは20代の頃、京都市内の飲食店で働きながら、いつか自分の店を持ちたいという夢を持っていた。しかし、心身を削って働く上司やスタッフの姿を目の当たりにし、自身の方向性に疑問を持ち始める。ある日、人参を刻みながら、ふと「野菜ってどうやってできるのだろう?」と思ったことをきっかけに、野菜ソムリエの資格を取る勉強を開始。料理はできても、素材となる野菜のことを全く知らなかった佑介さんにとって野菜ソムリエの勉強は、新しい発見の宝庫だった。一方、書物などを通して自然に親しむ暮らしに興味が向いていた侑子さん。二人は京都で暮らしながら、理想の生活に向けての準備を着々と開始する。

2009年、貸農園を利用して初めて野菜が収穫できたことに大きな感動を覚え、もっと本格的にやりたい!という思いが強まった。ほどなく二人は結婚。しかし、佑介さんは飲食店での仕事の無理がたたり、体調を大きく崩してしまう。仕事に行くのがやっとで、大好きな田畑に行くことができなくなり、「健康をすり減らして生きるのが人生なのか?であれば何のために生きているのだろう?」と苦悩。東日本大震災の際にはボランティアに駆けつけ、その現状を目の当たりにし、「人はいつ死ぬかわからない。であれば、やりたいことをやるのは今だ!」との思いを強くしたという。

友人の家作りを手伝ったり、田んぼで米作りを体験させてもらったりと、何度も高島に通いながら、移住者の先輩や、地元の人々と知り合いになり、ひとつひとつ不安を解消していった荒木さん夫妻。始めは知人のシェアハウスに入居させてもらって、落ち着いて暮らせる家を探したという。現在住んでいる貸家も、移住者の先輩から紹介してもらった住まいだ。人とのつながりに導かれて実現した高島での暮らし。今は「田舎暮らし練習中」で、しっかりと力量をつけて、将来的にはより自然に囲まれた場所で自給自足を土台とした暮らしを成り立たせていくのが二人の夢だ。「将来、子どもが生まれたら、荒木家の米や野菜や味噌などが食卓にある生活をしたい。そんな暮らしを想像すると、とても幸せ」と語る荒木さんの笑顔が輝いていた。

荒木さん夫妻のこれからの暮らし

お菓子作りが得意な侑子さんは「HAPPY SWEETS ki-mi-do-Re（キミドリ）」を立ち上げ、自然食品店での販売やイベント出店をしている。将来的には米・野菜作り、そしてお菓子作りのワークショップを開催したいと夢いっぱいのお二人だった。

高島市 朽木 中牧　小森 可美 さん（「ちゃみの森」運営）

人とのつながりを育む暮らし

見渡す限りの雪景色。JR安曇川駅から山手に車で約1時間、高島の中でも特に山間部に位置する朽木中牧地区で小森さん一家は暮らしている。

移住を決めたのは7年前。もともと妻の可美さんには田舎への憧れもあったが、料理人のご主人には当時住んでいた大阪での開業の夢があった。しかし、子供をのびのび育てられない街での暮らしに限界を感じ「自分の夢も大切だけど、自分のパートナーの夢を叶えることの方が大切だから」というご主人の熱い気持ちのもと、移住を決意。様々な地域を下見する中、「とことん田舎に行かないと移住する意味も面白味もない」というご主人の提案で朽木を訪れた。深い森に囲まれ、小学校があり、近くに市営住宅もあり、そして偶然にも同年代の子供を持つ方と知り合うなど、度重なるご縁により移住が決まる。

移住後、ご主人は高島で料理の仕事を、可美さんはパンの製造販売を、共に知人の紹介を通じて始めた。また、蔵を利用した事業を計画し、高島市が募集するビジネスプランオーディションに応募し、見事グランプリを獲得。その助成金を元に蔵の改装を行った。しかしその後、可美さんの妊娠を機に金銭的にも精神的にも苦しい日々を過ごしたこともあった。「何事も『こうしなければ』『こうするべき』に囚われて、それができない自分に落ち込み、どんどん心に余裕がなくなっていった。でも、実はそういう考えを手放すことで、例えお金がなくても心にゆとりができ、目の前にある幸せをしっかり感じることができる。そこに至るまでは本当にたくさんの人に助けられた。」そう語る可美さんは移住当初から、家の前を行き交う人に積極的に声をかけたり、家族間で心を打ち明ける機会を作ったりと、人とのつながりに対してまっすぐで強い想いを持っている。この想いはご主人の言葉や子供たちからも伝わってくる。田舎暮らしの中では、人との関係は特に大切にしたいこと。関わるきっかけを自ら作ることや、人との関係において気持ちに素直でいることの重要さを感じた。

現在改装した蔵では、これまでの経験を通じて同じような苦しみを持つ女性を助けたいという思いから、自分自身と向き合う時間を提供するリトリート施設を運営している。また、施設運営と併せて様々な講座も開催され、遠方からの利用もあるなど需要は高い。朽木の豊かな自然と、一家の人への深い思いやりが、多くの方から必要とされる空間を作り上げている。

＊「びわ湖源流の郷たかしまビジネスプランオーディション」…高島市による起業や経営革新を支援する事業。高島市にある多彩な地域資源を活用し、地域を活力あるものとしていくことに貢献する事業計画を募集する。グランプリに選ばれた事業計画は、事業立ち上げに向けた準備に対し各種サポートを受けることができる。また、事業化（創業等）に際し、高島市地域産業創造事業補助金の交付を受ける場合は、補助率の優遇を受けることができる。詳細は、高島市 商工観光部 商工振興課へお問い合せください。

小森さん家族のこれからの暮らし

暮らしについてご主人は「人と違うことをするから楽しい。こうして田舎で楽しく暮らしていることを知ってもらい、世の中のたった一人の人だけにでも何かのきっかけをつくれるようにしたい。」と穏やかな笑顔で語る。

障がい者福祉の要素を取り入れたカフェを開くのが将来の夢です！

レポーター紹介（小森さん、佐山さんを取材）

八木 麻衣 / やぎ まい
京都府京都市在住・カフェ店員

田舎への移住に興味があり、移住者の方から話を伺えることに魅力を感じ、レポーターに応募しました。実際にお会いすると、どの方も予想以上に暮らしに対して熱い想いを持たれているのが印象的でした。そして、自分の望む暮らしへ沢山のヒントを頂きました。この経験を今後、自分や自分の周りの方へつなげていきたいと思いました。

（左）小森さん夫妻と末っ子のそらくん、奥は改修した蔵（中上）可美さんが天然酵母で焼き上げるパン（中下）蔵でのカフェ（右上）秋、森に囲まれた家の外観（右下）冬、雪に覆われた庭からの風景

（左上）わんちゃん3びき、ねこちゃん1ぴきを飼っています（左下）妻の亜希さん（中上）佐山邸と Blue bicycle Shop 外観（中下）恭一さんとセルフビルドしたお店（右）店内にはオシャレな自転車が並ぶ

高島市 安曇川町 南古賀　佐山 恭一 さん 亜希さん（「Blue bicycle Shop」運営）

自転車が生む、暮らしの楽しみ方

JR安曇川駅から車で約10分、自然に囲まれたとても雰囲気のある小さな集落。佐山さん一家はここで暮らしている。

佐山恭一さん、妻の亜希さん共に滋賀県出身だが、結婚後は仕事の関係で埼玉で暮らしていた。しかし、亜希さんの田舎暮らしへの思いと、恭一さんの自転車屋独立の夢の実現に向けて6年前に移住を決意。子供たちもまだ幼かったため、亜希さんの実家の竪田（滋賀県大津市）に近い田舎を探し、安曇川にたどり着いた。

自転車屋「Blue bicycle Shop」のオープンは2013年3月。学生の頃から自転車が好きだったという恭一さん。自分のお店では好きなメーカーの自転車を扱い、自転車を通じて楽しさを伝えたいという思いから、セルフビルドで建てられた店舗には田舎では見かけることの少ない海外のオシャレな自転車や、カラフルでポップなパーツが目を引く。当初は、生活費の確保も考慮し京都方面での開業も視野に入れていたが、自転車屋としてやりたい形を優先させ、より自由度の高い自宅での開業に至った。

「田舎での暮らしは、街で稼いで休日に田舎を満喫するか、日々田舎で働いて満喫しながら出費を抑えた生活をするかのどちらか。生活のイメージを作っておくのが大切」そう語るのは、自転車屋をあらゆる面から全力で支え続ける亜希さん。田舎での生活はお金がかからないと思われがちだが、税金や家や車の維持費など、何かとかかるのが現実。ただ、暮らしの中で何を大切にしてどのように過ごすか、自分次第であらゆる選択肢が広げられるのも田舎ならではかもしれない。お金を稼ぐことと、自分の思い描く暮らし方をすること。充実した田舎暮らしには、このバランスを意識することが大切だ。

現在は、自転車屋の営業の傍らスキー場などのアルバイトをしながら生計を立てている。亜希さんは無農薬での野菜作りをしており、そこで収穫される野菜など体に優しく安心安全な素材を使用した手作り石鹸の販売も行っている。決して楽な生活ではないと話すが、日々自然と触れ合い、畑で採れる新鮮な野菜を食し、家族との時間を大切に過ごしながら田舎暮らしを満喫している。恭一さんと亜希さんはあらゆる場面で、お互いを信頼し支えあっている関係が特に印象的で、これも暮らしの中の重要な要素となっているのかもしれない。「大変だけど楽しまないと！」そう話す亜希さんの言葉からも、エネルギッシュに日々を楽しむ一家の姿が伝わる。

佐山さん家族のこれからの暮らし

自転車屋をメインの収入源にすることが目標。自転車という遊びのツールを使って高島を知らない人や離れがちな若い人たちに、ここに住みたいと思えるような地域の良さを伝えていきたい。

高島市 朽木 木地山　加藤 みゆきさん（漫画家）

たくさんの偶然は、必然の縁

田園風景の広がる高島市街地から、山々に囲まれた朽木の中心部へ車で30分。さらに20分ほど細い谷間の山道を奥に走る。うっすら雪化粧をしていた山々も、加藤みゆきさん一家の住む木地山集落にたどり着くころには厚みを増し、辺り一面を覆っていた。集落の戸数は7軒で、みゆきさん家族を除くと全員65歳以上という限界集落だ。

この集落に2000年、女性一人で移住をしたみゆきさん。こんな山奥に移り住むなんて、よほど固い意志を持って計画的に移住をされたのかと思いきや、意外な経緯を聞くことができた。

キャリアウーマンを目指し、中国語専攻の外国語大学を目指していたみゆきさんだったが、担任の勧めによりスワヒリ語専攻で受験し合格。大学生の時に訪れたアフリカ・タンザニアの人々のたくましさに驚くとともに、日本の昔の暮らしについて何も知らないことに気づかされた。卒業後、知人の勧めで意図せず自然観察指導員の仕事に就き、朽木へ移住。釣りを題材とした漫画を職場の通信紙に描くために紹介されたのが木地山の住人だった。その後、ハイキングの行き帰りなどに度々木地山を訪れ、集落の人とあいさつを交わしながら仲良くなっていったそうだ。人生って不思議な縁があるものだ、と改めて感じさせられた。

みゆきさんは現在、東京から移住された旦那さんと3人の子どもの5人暮らし。集落のおじいさんやおばあさんから「出て行ってほしくない」「あんたがいてくれるから私らもおれる」と言われるほど慕われている。これほど集落にうまく溶け込んでいるのは、「郷に入れば郷に従え！」些細なことでも地元の人に合わせることが大切。でも信念まで変える必要はない。」という田舎暮らしの心構えを持っているからなのかもしれない。

そんなみゆきさんの木地山お勧めポイントは「近所の人が子どもを温かく見守ってくれる」「子どもが街でできない遊びをくたくたになるまでできる」「気を使うことなく、子どもをしかれる」などなど。逆に「子育てをする上で病院が遠い」「学校の友達と近所ですぐに遊べず、習い事も送り迎えが必要」「獣に畑を荒らされたり、家にテンやカメムシが入ってくる」といった田舎ならではの不便さもあるそうだ。それでも、家には光回線が引かれておりネットショッピングも快適。山の暮らしに無理をせず、必要に応じて現代的な便利さも取り入れているのが印象的だった。

加藤 みゆき さんの これからの暮らし

来春には薪ストーブ兼ボイラーを導入した家を新築して、プロパンや灯油を使わないシンプルな暮らしを始められる予定です。現在住んでいる借家が空くので、「ぜひ若い方に木地山に移住して欲しい」とのこと。

自然と共生する半農生活、馬と暮らすのが夢です。

レポーター紹介（加藤さん、平井さんを取材）

多胡 亮 / たご あきら
滋賀県大津市在住・環境教育ファシリテーター

もっと噛んでみたい！高島
ここ数年、事あるごとに高島に通っている気がします。高島に集い、暮らしている面白い人々や文化。個性的な移住者の方々。もっと知りたくなって、レポーターに応募したけれど、まだまだ味が出てきそう・・・。

（左上）裏庭は子どもたちのスキー場（左下）日当たりの良い居間（中上）毎日、薪で焚く五衛門風呂（中下）火で暖まる風呂窯（右）加藤邸外観。1、2階とも六畳と四畳半の2部屋＋1階に炊事場と便所があり。

（左）人生の中で少し立ち止まり、住まいを作る時間を持つ（右上）平井邸遠景、探し続けて得られた理想の環境（中下）平井夫妻、土間のリビングにて（右下）真季さんの作るアクセサリー（お米のシリーズ）

高島市 安曇川町 中野　平井 崇さん（林業）真季さん（アクセサリー作家）

暮らしをつくる楽しさと安心感

平井さん夫婦は大阪生まれ大阪育ち。自然に親しんだことも田舎に憧れたこともなかったが、今では廃屋寸前だった古民家を改築し、野菜を自給するほど高島での生活を満喫している。玄関を開けると、床をはがして作った土間に薪ストーブの火がゆらゆらと燃えていた。「これぞ田舎暮らしの醍醐味!!」と憧れてしまう。

こんな暮らしのきっかけを作ったのは、アクセサリー作家である真季さんだった。次々に入るオーダー。「どんどん作って、すぐにセール」するファッション業界のサイクルの速さ。疲れ果てて訪れた屋久島の圧倒的な自然に「都会が進んでいるとばかり思っていたが、自然の中から得るものがたくさんあるんだ！」と価値観が変わり、環境や世界の問題について考えるようになった。そして、タイミングよく農業を継ぐために高島にUターンした友人から畑を借り、毎週末大阪から電車で通い始めた。最初は力仕事の手伝いのために付き添っていた崇さんも、気が付くと体を動かす楽しさや帰りのビールのおいしさがやみつきに。

徐々に知り合いもでき、「こんなに通うなら住んでしまえ！」と1年もしないうちに移住してしまった。高島に暮らしながら理想の環境を求めて家を探し、2013年7月に現在の家に巡り会い、プロに教わりながら夫婦で改築を進めている。

潔い決断と行動力に驚かされる一方、仕事や日々の暮らしに不安がなかったのか気になってしまった。そんな疑問に2人は、「都会はなんでもお金で済ませられて、そんな感じも怖いし、今の方が精神的に楽で面白い。」「暮らしをつくることができるから愛着がわく。こんなこと街にいたらできない。」と、とても楽しんでいる。また地元の人との付き合いについても、「人とのかかわりは大事。見てくれていてありがたい。都会では同世代や同じ趣味などの狭い付き合いだったが、今は、幅広くて楽しい。」「困ったことは自分たちだけで解決しようとしなくていい。周りの人に頼ればいい。」とキッパリ。「収入は減ったが、買い物もあまりしないし、誘惑するものもない。」「周りも何とかしてるし、子どもができても大丈夫じゃないかな。」ときわめて楽観的だった。

田舎暮らしを成功させる秘訣は、「住みたい！という想いに素直に向き合い、明るく前向きに行動する」ことであり、それを支えているのは「人や自然とのつながり」という安心感に違いないと思えた。

平井さん夫妻の これからの暮らし

音楽イベントなどを行って、人が集まり一緒に楽しめる場にしていきたいです。ゆくゆくは、小水力か太陽光などエネルギー自給にも挑戦してみたい。でもまずは、家の改築を進めて、寒さを防ぎたいですね。

高島市 安曇川町 泰山寺　高橋 章隆 さん 佳奈 さん（「みのり農園」運営）

高島の『土』に魅かれて

■会社員から農業へ

「森林資源の活用やフェアトレード、農業支援などの環境プロジェクトを行う個人やNPO団体に融資をする団体で働いていたのですが、その団体の方針で『融資をして支援するだけでなく、自分たちでも環境プロジェクトをやろう』ということになり、千葉県で農業プロジェクトを開始しました。農業プロジェクトに関与し、農業のすばらしさに目覚め、独立して農業をしようと決めて2013年4月からここで農園を始めました」と奥様の高橋佳奈さん（以下「佳奈さん」）。

てっきり農業を始めたご主人に奥様がついてきたと思っていたのですが。「元々『食』に興味があり、妻が始めた農業を見に行ったり、手伝ったりしているうちに私も農業に惹かれ『じゃ、一緒にやろうよ』と。先に妻がここで農園を始め、同年5月に私が会社を辞めて合流しました」とご主人の高橋章隆さん（以下「章隆さん」）。

では、なぜ高島だったのでしょう。

■なぜ、高島・泰山寺地区？

東京で暮らしていた二人は、東日本大震災の影響を考え、佳奈さんの実家が大津京（滋賀県大津市）だったこともあり、京都府から滋賀県周辺で土地、いや『土』を探し、高島に出会いました。

高橋ご夫妻が行う農業は『稲作』ではなく『畑作』。基本的に『田』と『畑』の土はまったく別物で、田んぼの土は粘土質で水はけが悪く、畑向きといえません。滋賀県は『稲作』が盛んな地域なので、田んぼの跡地を利用した畑が多いのですが、ここ高島・泰山寺地区は戦後の森林開拓地で黒ボクという畑に適した土でした。『土』に着目しながら選んだ土地が高島だったのです。

■泰山寺での野菜作り

高橋さん夫妻は、その土と自然由来の有機質肥料（鶏糞、米ぬかぼかしなど）を使って普段使いの野菜から、地域の在来種である万木かぶ（高島市安曇川町の万木地区）や、チーマディラーパ、自然薯、白いとうもろこしなど国内外のめずらしい野菜も作り、道の駅や野菜にこだわるレストランなどへ出荷しています。

そんな多種の野菜が植えられ、賑やかな高橋さんの畑ですが「これ、ブロッコリー。残念なことに鹿に全部やられてしまって…」と佳奈さん。鹿の登場も賑やかそう。山が近いため、ここでの農業は獣害との戦いになるそうです。

高橋さん夫妻のこれからの暮らし

販路を広げたり、種まきから収穫まで体験できるワークショップ、農場レストランといった展開も考えています。また高島は、移住者同志の集まりもよくあるそうで、これから参加して色んな方々と繋がっていきたいと思います。

大山崎町地域の話題を中心としたミニコミ紙を制作発行しています！

レポーター紹介（高橋さん、馬場さん和田さんを取材）

大場 智恵 / おおば ちえ
京都府乙訓郡大山崎町在住

交通の不便さや自然の厳しさがあるからこそ美しい高島。その不便さや厳しさゆえに人と人が必然と、けれども大らかにつながり、心豊かに暮していける…それが今回2組のご夫婦の取材を通じて感じた高島の魅力です。

（左上）チーマディラーパ（左下）万木かぶ（中上）グリーンリーフソレル（中下）鹿に生長点を食べられてしまったブロッコリーの畑（右）高橋夫妻、1月の「みのり農園」にて

（左）天増川と「滋賀の奥座敷 天増川」（写真右上）（中上）お店の看板（中下）馬場さんと和田さん、店内のお座敷にて（右上）和田さんの手打ち蕎麦（右下）お店の外観、馬場さんがセルフビルドで改修した

高島市 今津町 天増川　馬場 清 さん 和田 恵子 さん（「滋賀の奥座敷 天増川」運営）

釣り高じて天増川の古民家で人をもてなし暮らす

■天増川に惚れこんで

「京阪神でこれだけきれいな川はないんです。」釣りで日本全国を巡った馬場清さん（以下清さん）が、太鼓判を押す美しい天増川。イワナやヤマメが釣れ、馬場さんが今住む家から先に民家はないので、川は汚れることがなく、水はそのまま飲め、しかも美味しい。この川に惚れ込み、通ううちにこの家に出会い、パートナーの和田恵子さん（以下恵子さん）と移り住みました。しかし、この家が自分のものになるまでには大変な労力と時間がかかりました。

■買うことが出来ない家々

天増川地区の土地は、先祖代々伝わる土地で「おまえはあっち、おまえはこっちに住め」と口頭での相続となり、登記をしてきませんでした。土地を買うには関わりのある親族一同を訪ね歩き、承諾を得なければなりません。それでも馬場さんたちは、静かな山あいの、青い空が高く開く天増川沿いのこの家を手に入れたかったのです。直近まで住んでいた人に「ここが好きやから譲ってください」と何度も頭を下げ、頼みました。

そして登記は司法書士さんに依頼して6か月、馬場さん自らが改装を行って4年。やっと自分のものになったのが5年前になります。

■旬魚旬彩料理と手打ちそばとゆったり過ごせる民家が看板

やっと手に入れた民家は、恵子さんが打つ手打ちそばをメインに、四季折々に採れる山菜、近場で獲れるイノシシやシカ肉、清さんが釣った旬の魚と育てた野菜などを自ら料理して出すお店「滋賀の奥座敷　天増川」として生まれ変わりました。

そばは、恵子さんこだわりのそば粉を8割使い、打っています。ある時、いつもの産地と違うそば粉が送られてきて、そばを出すのを1週間やめたことがありました。味に妥協しない姿勢に、粉屋さんも慎重に送ってくれるようになったそうです。

お座席は、訪ねて来た方が食べた後もごろんと寝転がれるように囲炉裏のあるお座敷。天気のいい日は、清さんお手製の移動式石窯を屋外に持ち出し、ピザや採れたて野菜を焼くことも楽しめます。

年内には、宿泊用ゲストハウスが完成予定。驚いたのは、下水がないため生活汚水が美しい天増川に流れることを憂い、自ら排水層を作り濾過して、川に流す仕組みにしてあること。

自分たちやお客様だけでなく、自然や川の流れつく先の人々にも思いを馳せ、出来る限りのことを当たり前のように楽しむ清さん・恵子さん夫妻。その見えぬ心遣いが、ゆったりとした時間と空間を感じさせるようですね。

馬場さん和田さんのこれからの暮らし

ゲストハウスが完成したら、いろいろなイベントを催したいですね。河原で星空を見たり、ホタルを復活させてホタル見物…夢は広がります。いつまでも元気で命ある限りここに住んで楽しみたいですね。

高島市 新旭町 旭

夢は絵に描く

北出 治恵 さん（「喫茶 古良慕」雇われ店主）

～自然と人間と循環と～

案内されることがなかったら、見落としていたかもしれない。空き工場を利用して作られた「喫茶 古良慕」の外観はまさに倉庫。けれど扉を開けると、パチパチと薪のはぜる音と共に暖かい空気に包まれる。入口付近には、店番を勤める北出治恵さんチョイスの地球にやさしい生活雑貨や、自然が生み出したおいしい食品が並んでいる。店内のテーブルの上には「きょうの猫村さん」など、これまた北出さんワールドの本がそっと置かれている。

「喫茶 古良慕」は古材や古建具等を扱う島村葭商店のギャラリーに併設されている。天井を塗り替えたい、照明を変えた方が映えるな等、真面目に考え、ふるもの君たちと仲良く過ごしている北出さん。落ち着いた声で丁寧に話すことからは想像できない、驚きの24歳。おいしい焼き菓子を作る、美人なお姉さんである。

北出さんの夢は「畑のある暮らし、そこでお店をする私」。東日本大地震以降、食の安全性に強く疑問を感じ「自分の暮らしには自分で責任を持ちたい」という想いから、この夢が芽生えた。北出さんの考える店とは「自然界の循環や小さいものの命を大切にし、商売商売しすぎないこと」であり、また「お店とお客ではなく、にんげん対にんげんという関係を大切にしたい」というものだ。理想論かもしれないが、今の世の中のあり方に「？」と感じている北出さんは、あきらめることなく理想のお店を模索する。

就職活動中に「滋賀農市」*に足を運び、高島で就職するが、しばらくして現実と理想のギャップに苦しむ。そんな時、古良慕で開かれていた「移住者交流会」に参加し、オーナーが店番を探している事を知り、縁あって半年後にお店に立つことになった。

高島での暮らしはどうか。まず、作り手と近い野菜は安心して食べることができる。店も少ないので、物欲が湧かず、お金は減らない。「生水・カバタ」等湧き水を大切にする文化も残っている。海（湖）も山も近いので、時間のある時はハイキングしてゆったりと過ごす。まさに求めていた地！と言いたいところだが、全国を見てみたい北出さんにとってここはゴールではない。夢の実現のための潜伏期間は3年。数年単位で店番を替え、夢を持つ若者を応援していきたいというオーナーの意向もあり、ここで北出さんに会えるのも再来年の4月までだそうだ。これからも北出さん流であちこち飛んで行くだろうけれども、最終的に高島を選んで、是非とも夢をかなえて欲しいと思う。

＊「滋賀農市」…2012年1月～3月の第三土曜日に、京都市四条烏丸の Cocon Karasuma で行われていたイベント。滋賀県の豊かな自然のなかで、日々こだわりを持ってものづくりに励む1次産業・2次産業の人々。そんな彼らの自慢の物産を「市（マルシェ）」のスタイルで対面販売していた。

北出 治恵さんのこれからの暮らし

実は北出さんにはパートナーがいる。ロケットストーブで天然酵母のパンを焼くと聞いて会いたくなったが、彼も海に近い将来一緒にユカイに暮らすんだろうなと思う。お二人の共通点の一つに格闘技がある。

レポーター紹介（北出さんを取材）

宮本（ゴロ山）香織 / みやもと かおり

大津市瀬田在住。ゴロ山と異名を取るほど昼寝好き。お昼寝隊を結成し、公園・お寺の縁側等怪しまれながら、怒られながら活動していた。

高島には多くの自然が残されている上に、昔の文化を学ぶイベントもたくさんあり、これまで私も数多く訪れました。移住されている方も大勢いらっしゃり、皆さんどんどん面白い事を仕掛けています。移住に興味のある方もない方も、遊びに来て頂きたいおすすめの場所です。

（左）倉庫を改修した「喫茶 古良慕」雰囲気のあるカウンター（中上）お店を取り仕切る北出さん（中下）店内への入口（右上）薪ストーブを備えたカフェ空間（右下）雑貨やアンティーク、古材の陳列空間

（左）床と天井を剥がして造った陶芸工房。住まいに併設。（中上）お手製のカップにレモンが芽吹きました（中下）改修中の玄関（右上）岡野邸からのぞむ里山の風景（右下）岡野邸外観。蔵もあります。

高島市 今津町 岸脇

今津でつくる新たなくらし

岡野 史子さん（陶芸家）

川沿いの集落に、陶芸家 岡野史子さんが日々をていねいに暮らしている。やさしい笑顔がすてきな方だ。

2013年6月、今津にやってきた。工房を兼ねる古民家は、近所のネコが訪ねてきたり、すぐそばの水路に住むカニがちょこちょこ歩いていたりする。夏にはホタルが舞う清流だ。焼物の土の色と淡い釉薬が、古民家の雰囲気にマッチしている。太い梁は、武骨な力強さを感じさせる。

親族に窯元があり、以前から陶芸になじみがあった。「私は私の焼物をつくりたい。」陶芸の仕事をする決意をした岡野さんは工房とする土地と建物を探した。ここに住もうと思ったのは、広さ、環境などの「条件があっていたから」。地域になじむのは大変でしたかと尋ねると「まだなじんでないです。」と恥ずかしそうに微笑む。公民館で週3日アルバイトをしており、顔見知りも増えてきた。「風と土の交藝*」のスタッフ活動を通して、高島市内で知人が増え、新しい出会いが世界観を広げている。地域行事にも顔をだし、集落の人々にも受け入れられつつある。11月、子供たちが夕方、集落内を練り歩く「いとさんぼんさん」という行事があるが、今回はしきたりが分からず見送ってしまった。次は作法を学びたいと意欲的である。

「衣食住の手仕事を全部」がモットーの岡野さんは、自宅を自分で改修している。工房の空間は床をはがして土間にした。住まいの方は春までに床を張りかえ、壁を塗り、夏までに網戸を設置することが目標だ。自宅はどんどん進化して、居心地の良いオリジナルな家になってゆく。

「ミルクは入れますか。」作品のカップでコーヒーをごちそうになった。陶器を通して伝わる、控え目で静かな温かさ。ここには高いビルやショッピングモールはないけれど、面白いことがたくさんあって楽しいと語る。陶芸と日常の手仕事と友人たちとのやりとり。忙しくも充実した毎日。新たなくらしは生活と芸術の融け合った、発見と創造の連続である。

高島市は、筆者にとってはゆかりのない土地だが、落ち着ける場所だ。広い広い空とまっすぐ続く畦道。ゆったりと流れる時間。「田舎」の良さがここにあると思う。

＊「風と土の交藝」…P1参照

レポーター紹介（岡野さんを取材）

井手 清香 / いで さやか

WEB ライターとしてサイト上の文章やコラムなどを書いている。大津市在住。1児の母であり、将来のために通信制大学で法学を勉強中。
趣味はシイタケ栽培。今年は２００個収穫した。

レポーターに応募した理由は、湖西にはなじみがなかったので一度行ってみたかったからです。私は湖南に住んでいますが、見える景色や気候、雪の量も違うので驚きました。陶芸作家の方とお話をする機会という貴重な体験ができてよかったです。